

Eureka VII

六年制通信 No.31 令和3年1月22日(金)号

1 万時間

共通テストが終了しました。6年生の皆さんは自分の力が出せましたか。自己採点をして、これから受験校の選択に入りますね。言うまでもなく自己採点の結果が君の努力の証であり実力です。それを踏まえて、担任の先生とよく相談をして、「受かるところ」を受けたまえ。もちろん、これからのひと月余りで学力は上がります。しかし浪人覚悟で…というのは決してかっこいい選択ではありません。結果として浪人せざるを得なくなったとしても、合格経験を持たずに浪人してはいけません。どこかしら受かった経験をしなくてははいけません。その上で、浪人するのならしなさい。今まで受かって悔しがっている生徒に出会ったことはありませんよ。

今回の共通テストの英語（リーディングだけですけど）を解いてみました。う～ん。否定的な感想しかないなあ。まず、このパターン、長続きしませんね。つまんないですから、問題が。恐らく現中2から大学受験の問題は大きく変わることになっていきますから、あと4年くらいでまた大きな見直しですね。

メールやウェブサイトの英語に偏っていて、問題文（英文の量）が多くなっていますが、英語自体は簡単になっています。恐らく満点をとる生徒が出やすいはずですが、問題文の内容と英文のレベルについては、復習に耐えうるものではありません。残念ながら、この英文で英語を勉強すれば力がつくといったレベルではありません。リーディングに関しては、これまでの英語の勉強で大丈夫です。受験期に入って、やさしい英語を速く読む訓練は必要かな。でもその程度です。

大学入試のレベルによって、中高の授業が決まります。それが現実です。授業は入試に関係なく、定められた通り行くべきだと文科省は言うでしょうが、そんなわけにはいきません。試しに、大学入試に100mハードルを課してみるといい。中高の体育の授業がどうなるか。誰でもわかることです。ですから、共通テストの英語がこれでは心配ですね。もし、どの大学でもこのレベルの英語しか出なくなったら、恐らく若者の英語力は史上最も低くなるでしょう。

量を多くするということは、英文を読んで「ざっとわかる」力を試すということです。これがよくない。「ざっとわかる」と「ちゃんとわかる」との間には天地の開きがあるのです。授業を通して君たちは、英語が「ちゃんとわかる」ようになるべきです。綿密に文法に照らして論理的に内容を追うこと、そういう訓練が大切です。その上で重要構文の入った例文をたくさん暗記することが必要です。暗記については「暗記の再生だけをテストすること」は批判の対象としていいでしょうが、暗記そのもの

は批判されるどころかもっと推奨されるべきものです。

さて、ひと頃流行ったのですが、どんな分野でも一流になろうと思ったら1万時間の訓練が必要だというのですね。これには「量より質の問題だ」などの批判もあり、もう忘れられたかと思っていたら、最近将棋の藤井二冠の活躍で、また注目されているようです。つまり5歳の時に将棋に出会い、一日3時間の集中訓練を10年行うとおよそ1万時間。藤井二冠がプロになったのが15歳。計算は合っています。皆さんは信じますか。そして、一日3時間を10年、何かを続けることができますか。

1万という数字で思い出しましたが、昔、一日300回(30回を10セット)の腕立てを3か月強ですか、1万回した人がいました。そうすると明らかに体に変化が出るんだそう。そりゃそうでしょうね。男子諸君、やってみたらいかがですか。

私は1万時間という数字を文字通りに考える必要はなく、ただ一流になるためには何年もの長い月日が続けることが肝心だという、そういう意味にとっています。むしろ一流になる人の特徴としては、トータルの時間数ではなく「続ける」ということを文字通り実行している点だと思います。その結果膨大な時間を要しているだけで、本人は地道に毎日続けているだけでしょう。必ず続けるのです。例外を許さないのです。毎日、何があっても続けるのです。今日はしんどいからやめておこうとか、そんな発想が初めからありません。だいたい、今日できないことは明日も明後日もできませんものね。この、例外を許さない姿勢が習慣を作ります。そうなれば、何万時間だろうと苦も無く達成するし、そういう習慣を持っている人はすでに一流です。

冬休みのおすすめ

・百田尚樹 『野良犬の値段』 (幻冬舎)

思うに、百田さんはNHKが嫌いなんですね、きっと。大手の新聞社もお嫌いなようです。この人は確か、作家としてデビューする前はテレビの仕事をしていたのですから、メディアにはお世話になっていると思うのですが、同時に腹の立つ思いもいっぱいしたのでしょうね。また、内部の事情にも通じていることは、この小説にも十分反映されています。ホームレスを誘拐し身代金を要求する。相手は大手メディア。もちろんメディアは要求を拒否しますが、そのことが世間でどのように受け止められるかを非常に気にします。わからないように情報操作もしようとします。そのあたり、メディアの右往左往する姿を百田さんが面白がって書いているのが読み手にもわかります。ミステリーの謎解きを楽しむというより、作者の力点はメディア批判に置かれています。これは笑えます。SNSの時代に匿名の大衆が力を持っていく様子など、ちょっとしたホラーですらありますね。もちろん、ストーリー自体は面白いので一気読み間違いなしですね。

この作家では『永遠の0』、『影法師』、『BOX!』が私は好きなのですが、皆さんにお勧めしたいのは『聖夜の贈り物』(文庫版では『輝く夜』と改題)という短編集です。私は今でも時々読み返しています。心温まるファンタジーですよ。

BGMは ドリカム の WINTER SONG でした…。